インターンシップ20周年記念

私の体験　福島県庁　佐藤 千紘さん

馬には乗ってみよ 人には添うてみよ 何事も経験してこそ

中央大学がインターンシップ（就業体験）に取り組んで20年。学生が在学中に自らの専攻を生かし、将来のキャリアに関連した就業を体験する画期的なプログラムは“成人式”を迎えた。インターンで学び、社会へ羽ばたいていった先輩たち。中大法学部を卒業し、いまは福島県庁で大震災からの復興復旧に尽力する佐藤千紘さんに、インターンシップ20周年を記念して、寄稿していただいた。

わたしは、在学時に、衆議院議員事務所、国際労働機関、法律事務所、NPO法人の4カ所でインターンを経験しました。うち、国際労働機関と法律事務所でのインターンは、大学の授業の一環で単位認定がされるものです。

インターンを行った経験があるというと、意識が高い、活動的や積極的などとポジティブな意味で驚かれますが、わたしがインターンを行った理由は、人と違った特徴が欲しかったからです。

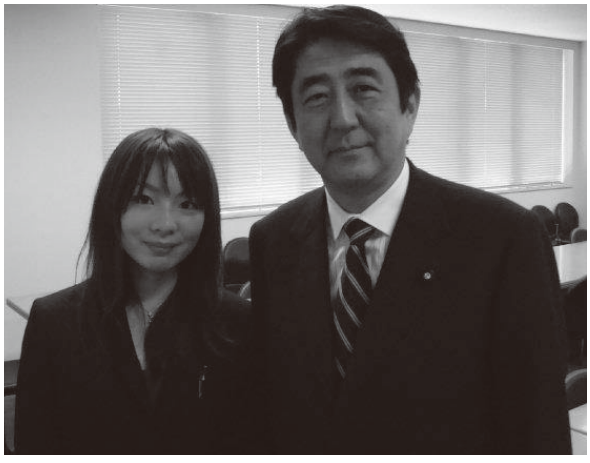
わたしは、運動や芸術など秀でるものがありません。かといって、賢いわけでも劣っているというほどでもない平均的な人間なので、他の人とは違う特徴が欲しかったのです。人が選ばないものを選び、したがらないことをする天の邪鬼になることで、何らかの特徴が得られると思いました。

当時、わたしは中桜会研究室に所属しており、周囲は司法試験の勉強のために研究室にこもっている状況でした。そこでわたしは、天の邪鬼精神から、研究室にこもらずに勉強をしよう、と思い立ちました。もともと座学より行動する方が性に合っていたので、誰もしていないけれど法律の勉強という本筋からもそれない、法律に関することを学べるインターンをすることにしました。

最初は、法律の成立過程を知るために衆議院議員事務所へ。次に、歴史も習慣も異なる世界の国々に共通する法律はどうつくられているのか興味を持ち、ジュネーブにある国際労働機関へ。それら2カ所で法律の形成過程を学んだので、今度は、つくられた法律が実際にはどう使われているのかを知るために法律事務所へ、計3カ所でインターンを経験しました。

誇れるような実績や肩書きのない自分でも、学生という身分一つで、興味のあるところへ関わることのできるインターンという制度に魅力を感じたので、気づいたら3カ所でインターンをしていました。

それぞれのインターンに共通することですが、インターンでは、当初の目的が果たされるとは限りません。わた



衆議院議員事務所で安倍首相と、左が筆者

インターンシップ20周年記念 **馬には乗ってみよ 人には添うてみよ 何事も経験してこそ**

私の体験　福島県庁　佐藤 千紘さん

し自身、法律の勉強のために行いましたが、結果的には、知識よりも知恵が身についたと感じています。

議員事務所でインターンをしたことで、失敗は人の注目を集め、そして、ずっと残るものだということを感じました。身近な有名人を思い浮かべてください。その人の功績よりも、むしろゴシップの方が情報として多く出てくるのではないでしょうか。太陽が普通に輝いているときは誰も見ようとしませんが、日食はみんな興味を持って見るのと同じです。

また、法律事務所では、人には口が一つなのに、耳は二つあるのは何故かを考える必要がありました。『弁護士』は読んで字のごとく雄弁な方が多いですが、聞き上手な方も多いです。かつて『代言人』と呼ばれていたように、弁護士は依頼人あっての職業。自分が話す倍だけ他人の話を聞かなければならないのだということを教えられました。

ただ、こういったことは直接教えられたのではありません。おのずと学ぶものです。本来“学ぶ”という言葉は、“真似る”から派生していると聞いたことがありますが、学ぶという姿勢には、受け身がありません。つまり、積極性が大前提なのです。勉強とインターンは、学ぶ道は違っていても、“学ぶ”ということは同じです。見たもの、知り得たもの、感じたものから、自分がいかにそれらを生かすか。その生かし方を学ぶ場が、インターンです。

百聞は一見に如かずという言葉が、流行語のように一瞬で消費されるものとは一線を画し、脈々と使われ続ける理由が、おのずと腑に落ちると思います。

そういった意味で、国際労働機関でのインターンは、その環境に合わせただけでも自分自身の変化を感じ取ることができました。インターンの際には、英語を用いていましたが、普段と異なる言語を用いることで、考え方そのものが変化するということです。

ジュネーブにある国際労働機関で経験を積んだインターン時代。「自分の変化が分かった」という。左端が筆者

人生の大きな目的は、知識を得ることではなく行動することである。

トマス・ハクスリー（英国の生物学者）

日本人は大きなものから小さいものへと考えますが、西洋人は小さなものから大きなものへと考えます。たとえば住所を書く時、日本では都道府県、都市、地区、番地の順に書きますが、西洋ではその逆に書きます。名前も同じで、日本人は名字を先に言いますが、西洋人は反対です。日付も同様です。

普段使っている言語体系から離れることで、自然と考え方も変わるのだということを体感しました。

さて、ここまでが、法律関係のインターンの経験談です。最後のインターン先は、それまでと全く異色のところで行いました。その理由は、就職活動をするにあたって、自分が何をやりたいのか分からなかったからです。自分自身が、何が好きで、何に向いていて、そしてこれからどういうふうに生きていきたいのか。そういったものが、自分のことなのに、全然分からなかったのです。

就職活動では、サービス業から公務員まで様々な職種の説明会に行きましたが、どれもおもしろそうに思えたし、やってみたいとも思えました。言い換えれば、優先順位がつけられていない状態でした。そのため、自分を客観的に見るために、自分が望まないことをしようと思い、異色のインターン先に飛び込んだのです。

なぜ望まないことをあえてするのかというと、そうすることで、否が応でも自分になじまない理論や考えをなんとか理解しなければならなくなります。それが、客観的になる一番簡単な方法だと思ったからです。

だからこそ、起業家の方々と関わるインターン先を選びました。就職活動をする、つまりは“他者のもとで雇用される”ことを望むわたしにとって、“みずから事業を行っている”起業家の方々は、まさにわたしが望まない状況にいるからです。そんな中でのインターンを経験することで、自分の軸というものも見えてきました。

軸というと理解しづらいですが、自分自身を支配する考えのことを指します。どこに行こうと、どんな状況であっても、自分の考えや行動に表れ

インターンの極意▶ ジェットコースターは、レールがあるからこそ無理がきく。
地上だから、エンジンを停めたって大丈夫。飛行機は、そうはいかない。

ている考えのことです。

また、そこでは、同じ色同士では何も生まれないけれど、異なる色が融合することで異色が生まれるということを肌で感じました。

善くも悪くも個性が重視されるのが、現代です。十人十色の社会だからこそ、異なる色が融合することで異色が生まれる。インド生まれのカレーとフランス生まれのカツレツが組み合わさって、日本でカツカレーが編み出されたようなユニークさが、そこにはありました。

最後になりますが、ある小説に載っていた一説をご紹介します。

『ジェットコースターは、レールがあるからこそ無理がきく。地上だから、エンジンを停めたって大丈夫。飛行機は、そうはいかない』

レールの上をゆく人生は嫌だという人がいますが、レールがあれば、好きなだけ無理ができます。インターンは、そんなレールの上をゆくようなものだと思います。レールがあるからこそ、速く走ることで目標に近づくこともできれば、ゆっくり歩みながら周囲に目を向けることもできます。これまでの学生生活で身につけた知識の生かし方を学ぶとともに、自分に足りないものを痛感できること、そして、学生という身分一つでどこにでも行くことができる、それが、インターンの魅力だと思います。

略歴／佐藤千紘氏（さとう・ちひろ）福島県福島市出身。福島県立橘高校を卒業し、中央大学法学部法律学科を2013年に卒業。総務省を経て、現在は福島県庁に勤務。在学時には、中桜会99期として入室し、法律を勉強する傍ら、法律の成立までの過程やその扱い方を学ぶため、国内外でインターンを経験した。

インターンシップ20周年記念

ニッポンの今、世界の今を知る。
激動の時代、学生は何を志すべきか。

～インターンシップ・サミット2014～

12月6日（土曜）　中大・多摩キャンパス9号館ほか
基調講演、パネル・ディスカッション、インターンシップ報告会、学生向け分科会
主催　中央大学（経済学部）　共催　中央大学南甲倶楽部

HAKUMON Chuo
学内配布場所一覧

中大生が作る中大生のための情報誌『HAKUMON Chuo』は、各キャンパスの以下の場所で配布しています。ぜひ手に取って読んでみてください。

●多摩キャンパス
各学部・大学院事務室
学生部
図書館
グリーンテラス
キャリアセンター
学友会
国際センター
生協2階
入学センター
炎の塔

●後楽園キャンパス
理工学部事務室
生協
ビジネススクール事務室

●市ヶ谷キャンパス
ロースクール事務室

●市ヶ谷田町キャンパス
総合インフォメーションカウンター
アカウンティングスクール事務室

●駿河台記念館
駿河台記念館1階ロビー